



RYUKOKU
UNIVERSITY

You, Unlimited

Ryukoku

広報誌「龍谷」

2026 VOLUME 102

文学部 坂中 一平 さん



Brand Story

世界は驚くべきスピードでその姿を変え、
将来の予測が難しい時代となっています。
いま必要なことは、「学び」を深めること。
「つながり」に目覚めること。
龍谷大学は「まごころある市民」を育てていきます。

自らを見つめ直し、他者への思いやりを発動する。
自分だけでなく他の誰かの安らぎのために行動する。
それが、私たちが大切にしている
「自省利他」であり、「まごころ」です。
その心があれば、激しい変化の中でも本質を見極め、
変革への一歩を踏み出すことができるはず。

探究心が沸き上がる喜びを原動力に、
より良い社会を構築するために。
新しい価値を創造するために。

私たちは、大学を「心」と「知」と「行動」の拠点として、
地球規模で広がる課題に立ち向かいます。
1639年の創立以来、貫いてきた進取の精神、
そして日々積み上げる学びをもとに、様々な人と手を携えながら、
誠実に地域や社会の発展に力を尽くしていきます。

豊かな多様性の中で、心と心がつながる。人と人が支え合う。
その先に、社会の新しい可能性が生まれていく。
龍谷大学が動く。未来が輝く。

You, Unlimited





広報誌「龍谷」

01 P01 Feature Article

巻頭特集 学長対談

多様性を結びなおす

作家・翻訳家 龍谷大学学長

李 琴峰 × 安藤 徹

02 P06 Ryukoku News

・環境サステナビリティ学部×情報学部

知の共創で新たな価値創出へ

・2027年4月、「びわ湖大津キャンパス」へ
新学部開設に向け、キャンパス整備が本格化

・瀬田の自然と大学の歴史が交差する
「Welcome Lounge」を瀬田キャンパスに開設

・龍谷大学×日本GXグループが、
世界的にも類例の少ない学生参加型・地域共創型の
環境価値創出・オフセット実装モデルを構築

03 P12 People, Unlimited

京都で深まる国際共修の学び

協働を通じて育む相互理解

坂本 達哉 さん 政策学部政策学科

P14

仏教の学びから映像の世界へ

制作会社のスタートアップも実現

坂中 一平 さん 文学部仏教学科

P16

LGBTQ+をあたりまえに

誰もが安心して心を通わせる場を創設

名波 有彩 さん 政策学部政策学科

04 P18 Education, Unlimited

約70年の時を超え、インドボダイジュが里帰り
学生たちが歴史を未来へつなぐ

三浦 励一 教授 農学部

横田 岳人 准教授 先端理工学部

P22

自分も周りもより幸せに

より良く生きるための力を育てていく

牧 久美子 講師 心理学部

05 P26 Research, Unlimited

健やかな眠りが未来を拓く

「睡眠教育アプリ」を開発

高原 まどか 講師 2027年4月情報学部着任予定

P30

ネイチャーポジティブ実現に向けて

環境DNAによる「ものさし」を開発

山中 裕樹 教授 先端理工学部

06 P34 Event Ryukoku Museum

古刹の寺宝が揃う貴重な機会

邪鬼の抱っこなど斬新な企画も多数

村松 加奈子 龍谷ミュージアム学芸員

07 P36 Connect, Unlimited

龍谷大学をつなぐ対談

龍谷大学×ソフトバンク×平和堂

地域のスーパーの課題に挑む「ハッカソン」

ソフトバンク株式会社

真田 潤平 さん

株式会社平和堂

荒川 季紗 さん

先端理工学部

藤本 雄一郎 准教授

先端理工学部

二宮 音乃 さん

08 P40 My Campus

マイキャンパス

09 P42 News & Topics

最新情報

10 P48 Book Café

新刊紹介

01

Feature Article 巻頭特集 学長対談

作家・翻訳家

李 琴峰

×

龍谷大学学長

安藤 徹



多様性を結びなおす

本対談の詳細は、宗教部発行の『白色白光』（2027年3月発行予定）に掲載予定です。
発行後、以下よりご覧いただけます。

<https://www.ryukoku.ac.jp/shukyo/committee/print.html>





李 琴峰

日中二言語作家、翻訳家。台湾生まれ。2013年来日。2017年に初めて日本語で書いた小説『独り舞』にて第60回群像新人文学賞優秀作を受賞し、作家デビュー。2021年『ボラリスが降り注ぐ夜』で芸術選奨文部科学大臣新人賞、『彼岸花が咲く島』で芥川賞など受賞多数。近著は世界各地のプライドパレードを巡った旅行記『虹はいまだ旅の途上』。

日本文学界において、性的マイノリティの人たちの多様な生と、それを取り巻く社会の問題を鮮烈に描いてきた台湾出身の作家・李琴峰氏。龍谷大学が2026年3月に発出した「ダイバーシティ宣言」とも共鳴する諸作品の著者である李氏のお話を直接うかがいたいとの学長の熱望もあり、今回の対談が実現した。2026年7月22日(水)に本学深草キャンパスで開催された対談の様様を紹介する。

安藤: 李さんはデビュー作『独り舞』以来、様々な境界に立つ人々、特に性的マイノリティたちを描いてこられました。その際、繰り返しプライドパレードの場面を取り入れ、その歴史や意義にも触れていらっしゃいますね。

李: プライドパレードは1969年にニューヨークで性的マイノリティたちの起こした抵抗運動が起源です。当時、性的マイノリティに対して、警察の差別や嫌がらせが常態化していました。性的マイノリティの人々はひたすら耐え続けていましたが、ついに我慢の限界に達し、自分たちの人権と存在を主張し、社会に対して明確な意思を表明すべく立ち上がりました。これがデモやパレードとなって世界に広がり、今のプライドイベントになっています。存在を否定され、プライドを奪われ続けてきた性的マイノリティの人々が声を上げた歴史的意義は非常に大きく、私にとっても単なるイベントではありません。自らの存在を証明する場、多くの多様な性的マイノリティの人たちと繋がるコミュニティの場として重要な役割を果たしています。

安藤: 龍谷大学も、LGBTQ+に関心のある学生たちの団体や有志が、東京や京都、大阪で開催されるプライドイベントにブース出展しています。私自身、今年6月の東京プライドに

参加してみて、本当に多くの人が集う一大イベントなのだと実感しました。ただ、そうした盛大さの闇の部分と言いますか、近年は商業化や脱政治化の問題も指摘され、LGBTQ+支援をイメージ戦略に利用する「ピンクウォッシュ」との批判もあります。

李: 規模の拡大は、社会的影響力を強める効果がある一方で、抗議や主張としての力が薄れてしまうという「光と影」の両面が出てくるのは致し方ないことだと思います。それでも性的マイノリティは声を上げ続けなければなりません。それは階段しかない建物が車椅子利用者にとって不便であるように、社会が依然としてマジョリティを前提に設計されているからです。

安藤: 「社会の設計図」という視点は非常に重要です。既存の社会制度や価値観が誰かを排除することで成り立っているという事実から目を逸らしてはいけませんね。

李: おっしゃる通りです。現在の法律や制度、社会通念など、すべてが性的マイノリティを想定していません。そのため、私たちはこの世界に生まれた瞬間から、様々な障壁にぶつかり、あらゆることに生きづらさを感じます。ここで重要なのは、この生きづらさは個人の問題ではなく、実は社会の側の問題だということです。この世の中を生きていくなかで、誰もが生老病死といった普遍的な苦しみを抱えます。しかし、性的マイノリティの苦しみはそれとは質が異なります。本当の性別で生きられない、結婚できないといった苦しみは、制度の不備などによって社会や他者から一方的に強いられるものなのです。こういった個人の努力では解決できない構造的な偏り、歪みを社会全体で理解し、改善することが大切です。



安藤 徹

名古屋大学大学院文学研究科国文学専攻博士課程修了。専門は日本古典文学、特に『源氏物語』をはじめとする平安朝文学。著書に『源氏物語と物語社会』（森話社）など。2000年に龍谷大学文学部に着任。2017年より4年間文学部長を務める。その後、副学長・龍谷ミュージアム館長を経て、2025年4月に第20代学長に就任。

安藤:李さんは、性的マイノリティの「生きづらさ」をめぐる多くの物語を紡ぎ、生と死のあり方を深く問う作品を発表してこられました。それは身を削るような、辛くて苦しい営為なのではないかと推察します。李さんにとって、書き続ける原動力は一体何でしょうか。

李:私は文学や芸術はそもそもマイノリティのためのものだと思っています。歴史的にも、社会の中でいないことにされている人々が文学や芸術の世界の中で自分を表現し、存在を示してきました。この存在を可視化することが私の創作の原動力であり、使命だと思っています。

安藤:李さんの作品やご発言を通して、文学や歴史など「虚学」とも言われる人文学の存在意義と果たすべき役割の大きさについて、古典文学研究者の端くれなりに改めて考えさせられました。

李:実学が技術を発展させるものであるのに対し、虚学はその技術をどう使い、どのような方向へ世界を導くかという「価値の指針」を示す役割を担っていると思います。虚学の一つである歴史を学ぶことも、単に過去を振り返るためではなく、私たちが今どこに立っているのかという「現在地」を確認するために不可欠です。現在地を知ることで、この先の道にどのような景色が広がっているかを展望し、正しい意思決定ができると思います。

安藤:李さんの作品によって日本文学がアップデートされ、文学と現実社会との関係が結びなおされていくことを期待しています。

李:私は、私小説をはじめとする日本の小説には社会に対する眼差しが不足しているので

はと感じています。とくに性的マイノリティについては、当事者に生きづらさを強いている社会の側の問題をもっと浮き彫りにし、訴える必要があると思います。また、同性愛なら同性愛、トランスジェンダーならトランスジェンダーと単一で描かれがちですが、実はこれらは複層的に重なり合っていることが多いです。インターセクショナルリティ、日本語では「交差性」と訳されますが、例えば外国人であり、同性愛者でもある二重のマイノリティの苦悩や困難はより複雑です。私はこういった複数のマイノリティが重なり合う人たちをもっと丁寧に描きたいと思っています。

安藤:本学が多様性の推進に取り組む上で、交差性への理解を深めることは不可欠です。

李:多様性とは「認める・認めない」といった社会や他者からの許可の問題ではありません。生物多様性と同じく、本来の多様性とはマイノリティもマジョリティも関係なく、そもそも一人ひとりに備わっている性質です。私は「より多くの人がより多くの選択肢を持てる社会」こそが真の多様性社会、ダイバーシティであると考えます。属性や制度によって生き方が制限されることなく、誰もが自分の立ち位置や居場所を見つけられる、自分の生き方を自分で決められる選択肢があることが未来への可能性を開き、その未来が当事者の希望になります。

安藤:大学がそうした可能性を切り拓く場になればと思います。私たち龍谷大学は、すべての命が尊重され、それぞれの特徴を持ったままに光り輝ける社会、「みんなちがって、みんないい」で終わらずに多様な関係を存分に結べるような真のダイバーシティ社会の実現をめざして、今後も努力していきます。



環境サステナビリティ学部×情報学部 知の共創で新たな価値創出へ

2027年4月に開設する環境サステナビリティ学部の岸本学部長、情報学部の藤田学部長が新学部の魅力や展望を語り合った。

岸本:異常気象や自然災害、地球温暖化などの環境課題が深刻化するなか、持続可能な社会の実現は世界的な課題です。解決には、あらゆる分野を含めて考える必要があります。環境サステナビリティ学部では、文理の枠を超え、環境科学に基づくアプローチと、自然資本を基盤とする経済学・経営学などの社会科学の科学的なアプローチの双方を学んでいきます。

藤田:現代の課題は一つの分野だけで解決できません。情報学部では、情報メディア専攻、知能情報システム専攻、実践データサイエンス専攻の3専攻を設け、専攻を横断した教育・研究を展開します。情報は単独ではなく、

様々な分野と掛け合わせることで新たな価値を生み出します。「情報×健康」「情報×スポーツ」など、情報技術で人や社会を繋ぎ、課題解決に貢献できる実践力と応用力を備えた人材を育成します。

岸本:情報技術は、環境課題の解決においても欠かせない基盤になります。こうした分野横断の学びを実践に繋げるため、両学部では特色あるカリキュラムを用意しました。環境サステナビリティ学部の特徴の一つは、体験・共創型PBL「クエスト科目群」です。琵琶湖流域でのプロジェクト、希少生物の保全林や湿原・離島といった環境課題の最前線へのフィールドワーク、企業やNPOなどでのインターンを通して、学びと実践を往復します。環境課題には立場や利害の異なる多様な人々が関わるため、正解は一つではありません。

価値観の違いを受け止め、視野を広げながら前に進む力を養うことをめざします。

藤田:現場の課題と向き合いながら学ぶ点は、情報学部も重視しています。情報学部では、2年生から複数の研究室でインターンシップのように活動する「未来共創ラボ演習」が特徴です。様々な研究の体験を通じて、授業で学ぶ理論や技術が何に必要なのかを理解し、卒業研究や将来の進路選択に繋げていきます。

岸本:環境倫理や情報倫理の共通科目の開講や共同研究など、両学部の連携にも力を入れます。「情報」は、あらゆる研究や社会実装を支える基盤です。だからこそ、情報をどう活用するかを考える上で、両学部の連携が欠かせません。例えば「龍谷の森」での生物多様性のモニタリングです。生物多様性を明らかにするために必要なデータや、生物の動きなどを捉えるセンサーの設置場所については、環境分野で検証・評価し、その上で、情報学の技術を活用し、データの収集や分析に繋げていきます。

藤田:情報学だけでは、広大な森のどこに、どのようなセンサーを設置すればよいのか判断できません。一方で、環境分野のテーマに応じたセンサーの開発や、より効果的なデータの収集方法の検討などに情報学の技術・知識を活かせます。また、欠損や異常値を含むデータを処理し、可視化することも情報分野の重要な役割です。

岸本:確かに、環境分野で扱うフィールドデータにはノイズが含まれることが多く、単純に取り除こうとすると必要な情報まで失う可能性があります。環境分野が課題を提示し、情報分野が技術で支える。両学部の専門性を掛け

合わせることで、学びも研究もより深まります。

藤田:2027年4月には、両学部が加わり、農学部、理工学部^{※1}と合わせて4学部がびわ湖大津キャンパス^{※2}に揃います。農学はサステナビリティを考える上で欠かせない分野で、理工学は課題解決と社会実装を支える基盤となる学問です。それぞれの専門性を活かしながら、分野を越えた共創を推進していきます。

岸本:4学部の知を循環させて、イノベーションを先導する、そんなキャンパスが理想です。

藤田:その実現に向けて、滋賀県は絶好のフィールドです。琵琶湖を中心とした豊かな自然環境があり、農業や工業など多様な産業が発達しています。学んだ知識や技術を実践したり、実際の課題に向き合うことで、将来の進路や目標にも繋げてほしいと思います。

岸本:環境サステナビリティ学部に入学を考える皆さんには、何か一つ、自分の「好き」を持ってほしいと思います。学部では文理の枠を超えた分野横断の学びを展開し、幅広い知識を身につけるとともに5つの専門教育プログラムで専門性を養います。社会全体を扱うサステナビリティの学びに無駄なものはありません。「好き」を出発点に、興味関心を広げ、自分の軸を築いていってほしいですね。

藤田:情報技術は進展が非常に速いため、社会で活躍するには、実践力や応用力に加えて、新しい技術を自ら取り込む「学ぶ力」が必要です。大学でこの力を身につけ、卒業後も学び続けながら、長く社会の第一線で活躍できる人になってほしいと思います。

※1 2027年4月、「先端理工学部」から名称変更

※2 2027年4月、「瀬田キャンパス」から名称変更



2027年4月、「びわ湖大津キャンパス」へ 新学部開設に向け、キャンパス整備が本格化

龍谷大学は、2027年4月に3キャンパスの名称を変更します。深草キャンパスは「京都深草キャンパス」、大宮キャンパスは「京都大宮キャンパス」、瀬田キャンパスは「びわ湖大津キャンパス」へと生まれ変わります。

また、びわ湖大津キャンパスには「環境サステナビリティ学部」と「情報学部」の2つの新学部を開設します。これに伴い、同キャンパスでは大規模な施設整備を進めています。

今回の施設整備では、新たな学びの拠点づくりとともに、キャンパス全体の機能向上を図ります。「環境サステナビリティ学部」の拠点となる7号館は、環境科学や自然科学をはじめとする幅広い知識と実践力を備えたグリーン人材を育む場として施設改修を進めます。研究室、演習室、学生実験室を充実させ、より専門的で実践的な教育・研究活動を支える

環境を整備します。また、「情報学部」の拠点となる2号館3階・6号館は、ネットワーク・IoT分野やメディア分野に強みを持つ情報処理技術者やデータサイエンティストを育成する新たな拠点として、教育・研究環境の改修を実施します。合わせて、瀬田キャンパス開設当初から使用している施設設備の老朽化への対応、コモンズ等の学生滞在スペースの拡充も推進します。

こうした施設整備に先行して、株式会社ロゴスコーポレーションと連携し、屋外の学生交流施設「Link Base（リンクベース）」の整備も進めています。

「Link Base（リンクベース）」は「つながり」と「調和」をコンセプトに、円形の縁側のような空間デザインを採用。中心にはシンボルオブジェを配置し、学生同士、さらには大学や

地域が緩やかに繋がる場を創出します。合わせて防災(レジリエンス)機能も備え、施設内の収納スペースには災害時に役立つ防災用品(エマージェンシーシート、水コンテナ、非常用トイレなど)を備蓄します。また、アウトドアの知見を活かした空間デザインにより、キャンパスの自然を身近に感じながら、授業の空き時間や短時間の打ち合わせなどにも利用できる、自由な発想を促す屋外交流スペースをめざします。

龍谷大学は、新たな学びを支える教育・研究環境の充実をはじめ、学生同士の交流促進や防災に配慮した環境整備を推進します。「びわ湖大津キャンパス」から地域や自然との調和を広げ、多様な人々がともに育み合うウェルビーイングなキャンパスの実現とさらなる魅力向上に取り組んでまいります。



環境サステナビリティ学部の拠点となる7号館



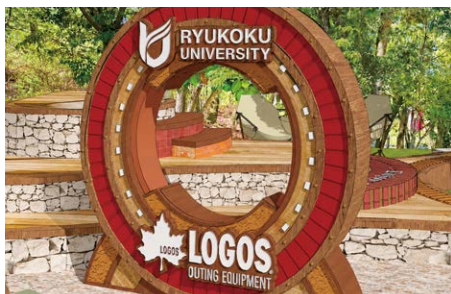
環境サステナビリティ学部の拠点となる7号館



Link Base(リンクベース)



情報学部の拠点となる2号館(3階)



Link Base(リンクベース)



情報学部の拠点となる6号館

瀬田の自然と大学の歴史が交差する 「Welcome Lounge」を瀬田キャンパスに開設

龍谷大学は、長期計画「龍谷大学基本構想400」に基づく取組の一つとして、学びと交流を深める空間「Welcome Lounge」を2026年8月に瀬田キャンパスに開設しました。これにより、深草・大宮キャンパスに続き、3キャンパスすべてにWelcome Loungeが整いました。“Welcome(迎え入れる)”と“Lounge(くつろぎの場)”が示すように、中高生や卒業生、地域住民、企業関係者など多様な来訪者を迎え入れると同時に、在学生の日常利用にも対応したリラックスできるコミュニケーション空間です。

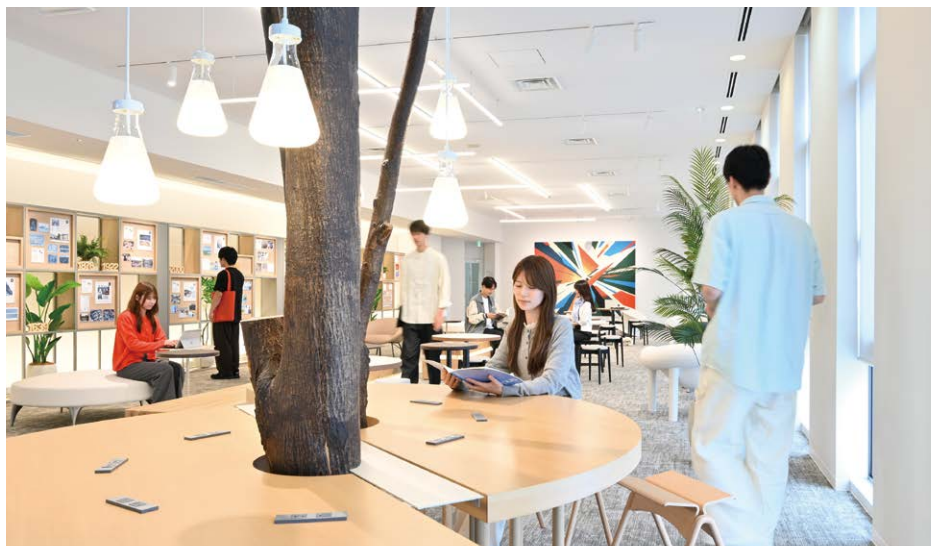
Welcome Loungeでは、自然共生サイトに認定されている「龍谷の森」にまつわる展示をはじめ、大学の歴史や学生の挑戦を動画やパネルで紹介し、龍谷大学がこれまで受け継いできた「伝統」と、新しい学びや挑戦に取り組む「進取」の姿勢を体感できます。館内のインテリアには「龍谷の森」で採取した素材を

はじめ、滋賀県産の「びわ湖材」を活用。身近な自然や地域木材の温もりに触れながら、空間全体で里山の息吹を感じられる設えとしています。

本学はWelcome Loungeを“龍谷大学体験空間”として位置づけ、本学への理解と関心を広げ、多様な来訪者の新たな行動や繋がりを生み出す場として育てていきます。



「龍谷の森」を、身近に感じてもらうため、写真やイラストを使用するとともに、実際の樹木や昆虫標本を展示



Welcome Loungeの全景

龍谷大学×日本GXグループが、世界的にも類例の少ない 学生参加型・地域共創型の環境価値創出・オフセット実装モデルを構築

本学は、日本GXグループ株式会社（以下、日本GXグループ）と連携し、個人の環境活動と企業のGX投資を連携させる「生活者・地域・企業が一体となったエコアクション」の新たなモデルケースを構築します。地域の脱炭素化、自然資本の保全・活用、一次産業の活性化、そして次世代GX人材育成を目的とした「ローカルグリーンランジション（地域GX）」の取組で、2027年4月の実装をめざします。

個人の環境活動は、効果測定や評価、活動の継続性に課題があり、個人の善意に依存している現状があります。また、企業や団体の環境活動も、生活者や社会への浸透が難しく、企業への共感といった経済価値に繋がりにくいという課題を抱えています。

本モデルでは、学生が日常的なエコアクションを専用アプリで可視化し、活動内容に応じてソーシャルクレジットとして報酬を付与します。これにより、学生の行動変容を促進するとともに、2万人規模の大学経済圏の活性化を支援していきます。エコアクションに紐づく環境価値はJクレジットに付与して取引されるため、企業はこのクレジットを購入することで、カーボン・オフセット（CO₂排出量相殺）に加え、GX人材育成や地域課題解決に貢



専用アプリの画面イメージ

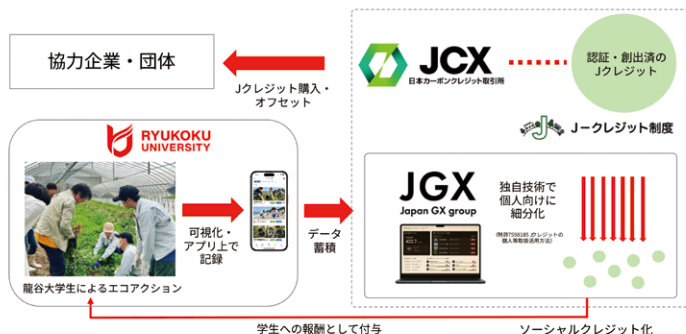
※開発中のイメージです。実際の仕様とは異なる場合があります。

献することになります。

本モデルにおいて、日本GXグループは、保有する特許技術を活用し、エコアクションによって創出された環境価値を定量化します。2027年4月に開設する環境サステナビリティ学部は、本モデルの制度設計に関わります。PBL（課題解決型学習）を通じて、学生自身がエコアクションを設計・実践・評価し、その社会的・環境的效果を測定することで、地域GXを担う人材育成を進めます。

本学は、本取組を通じて、学生一人ひとりの環境行動を社会的価値へと繋げるとともに、大学・企業・地域が連携した持続可能な社会の実現に向けた新たなモデルの創出をめざします。

●本事業の概念図



京都で深まる国際共修の学び 協働を通じて育む相互理解

龍谷大学は、2024年11月にテンブル大学ジャパンキャンパス(TUJ)と、教育および學術交流を促進する覚書を締結。2025年1月にTUJが本学の深草キャンパス近くに新拠点、TUJ京都を開設し、距離もぐっと縮まったことから、言語や文化の違いを越えて、両大学の学生が学び合う「国際共修プロジェクト」が2026年5月よりスタートした。

坂本達哉さんは、中学・高校で生徒会長や部活動のキャプテンを務めた経験から、リーダーシップに磨きをかけ、コミュニケーション力も一段と伸ばしたいと、社会言語学を研究する村田和代ゼミを選択。ゼミ長にも立候補した。「国際共修プロジェクトは、京都にしながら世界各国の学生たちと交流できる絶好のチャンス」と、迷わず参加を決めた。

3か月間のプロジェクトでは、異文化交流の理論を学び、両大学の学生がディスカッション。日本語でも積極的に意見を述べるTUJの学生に触発されて、自分の考えを英語で伝えることに挑んだ坂本さん。学びへの意欲も日に日に高まっていったという。最終課題は「ランチボックス(お弁当)」の企画開発。日本独自の食文化であるお弁当を多様な学生による混成チームで考案し、食を通じた異文化交流を形にするもので、両大学および本

学政策学部出身の起業家・矢野龍平氏が経営するカフェ「CØ」での販売を予定している。

坂本さんのチームは、龍大生3人とアメリカ人、ドイツ人の計5人。メニューについて様々な意見を交わすなか、アメリカ人学生からはベジタリアンやビーガンにも配慮したメニューが提案された。「多様な人たちが食べるお弁当なので、宗教や文化、慣習なども考慮しなければならないと気づき、大豆ミートや豆腐などを取り入れることにしました」

カフェ「CØ」で開催された企画発表会では、日本語と英語を交えてプレゼン。審査に携わった矢野氏から受けた、伝え方に関するアドバイスも学びになったという。

「このプロジェクトを通じて、国際交流ではそれぞれのバックボーンやスタイルを理解することが重要だと学びました。また、最終課題でチームリーダーを務めたのですが、物事の進め方や協働に対する価値観が異なり、まとめていくことに難しさを感じました。それでも一人ひとりに寄り添い、考え方を尊重しながらチーム間での相互理解に力を尽くす、自分が追求したいリーダー像を確立できたと思います。社会に出れば、国籍や文化の異なる多様な人たちと接していくことになるので、今回の経験を将来に活かしていきたいです」



龍谷大前深草駅近くのカフェ「C0」でおこなわれた企画発表会の様子

03

People, Unlimited

文学部仏教学科5年生
映像制作会社Zipmotion
坂中 一平 さん

仏教学科は、2027年4月に学科改組・改編
現在の真宗学科・仏教学科を統合し、新たな「仏教学科」を展開

仏教の学びから映像の世界へ 制作会社のスタートアップも実現

本学入学を機に京都の美しい景色に惹かれ「一人でできる趣味になれば」と一眼レフカメラを手にした坂中一平さん。撮影した写真や動画はSNSで公開。幼い頃から絵を描くことが好きで、アートにも関心があったことから作品が評価され、フォロワーから写真や動画の撮影を頼まれるようになった。なかでも世界的ファッション誌『VOGUE JAPAN』からの依頼には「まさか」と驚いたが、これが自信となり、本格的に映像制作活動をスタート。同じく動画制作を手がけていた本学の友人と幼なじみの3人で映像制作チームを立ち上げたところ、音楽関係者や店舗、企業からの依頼が次々と入るようになった。

「ただ、質の高い作品で依頼に応えるためには機材が不十分でした」と坂中さん。資金調達に頭を悩ませている時に救いの手になったのが、学生の挑戦を支援する「龍谷チャレンジ」だった。すぐに応募したところ採択され、必要な機材を揃えることができた。続けて本学の創業支援ブース「TREP」のサポートを受け、映像制作会社「Zipmotion」の設立も実現。作品の質の向上に加え、大学発のスタートアップということで信頼度も高まり、仕事の幅が広がった。「採択後に『共創HUB京都(仮称)』^{*}の紹介動画制作を任せてもらい

ました。作品を通じて龍谷大学に恩返しができるかなと思っています」

大学からの支援に加え、学部での仏教の学びも映像制作に役立っているという。坂中さんの役割は映像ディレクター(監督)。依頼者のイメージを形にしていこうと「龍谷ミュージアムで鑑賞した曼荼羅をはじめ、仏教美術の構図や配置、色彩などが画面構成の参考になっています」。さらに卒業論文で研究した『禅思想と日本の美意識』も表現に深く結びついている。「禅には簡素さを重視する“足るを知る”という価値観がありますが、自分の作品も本当に伝えたいものを際立たせるために余計な要素を削ぎ落とす表現を意識しています。また、すべて見せず、内に秘めておくことで美しさや価値が生まれる“秘すれば花”という考えにも影響を受けています。どうやって撮ったの?何を思っているの?といった、見る人にいろいろ感じてもらえる余白があるぐらいがちょうどいいですね」と坂中さん。

卒業後は自社での活動と並行して、東京の映像制作会社で「修行」をする。「龍谷大学に入学していなければ映像制作を仕事にすることはなかったです。カメラやアート、仏教の学びといった自分の点が縁によって繋がっていき、道が拓けたことに感謝しています」



※共創HUB京都(仮称) JR京都駅の近くに2028年春開業
予定の産学金連携と住居を備えたイノベーションハブ拠点



03

People, Unlimited

政策学部政策学科 4年生

一般社団法人ひと&コト D&I事業部「にじのわ」事業部長

名波 有彩 さん



LGBTQ+をあたりまえに 誰もが安心して心を通わせる場を創設

自身の性のあり方を示す「LGBTQ+」という言葉が社会に浸透する一方、依然として差別や偏見があり、当事者が安心して過ごし、思いを語れる場や機会は限られている。名波有彩さんは、こうした課題に真摯に向き合い、学びの機会と居場所づくりに取り組んでいる。

高校時代、偶然目にした同性の恋愛を扱ったアニメ作品をきっかけに性の多様性に関心を持ち、生きづらさを抱えるLGBTQ+の当事者に寄り添っていきたくSNSでの情報発信を始めた。大学はLGBTQ+に関する組織の立ち上げを見据え、起業の学びも充実する本学政策学部に進学。学修と並行して京都を拠点に様々な社会課題に取り組む一般社団法人「ひと&コト」に所属し、LGBTQ+をテーマにした映画上映会やワークショップの企画・運営に携わった。その後、団体の理解もあってLGBTQ+に特化した活動を展開する「にじのわ」を立ち上げ、SNSでの情報発信やイベント開催に加え、学生ジェンダーサミットや、本学もブースを出展している京都レインボープライドの実行委員も務めるなど、活動や交流の幅を広げてきた。そのなかで強く感じたのは当事者が安心して過ごせる居場所の必要性だった。「LGBTQ+の方が求めているにもかかわらず、日本には常設のコミュニティ施設が3

カ所しかありません。それなら私が作ろうと、大阪にある常設施設でのインターンシップに参加しました」と現場で運営ノウハウを学び、京都の町家に「にじの集居(つどい)」を作り上げた。コンセプトは誰もが安心して過ごし、集える我が家のような場所。オープンスペースだからこそ、カミングアウトを強要しない、性別を決めつける言葉を使わないなどの約束を設けたのは、多様な一人ひとりに寄り添ってきた名波さんの思いやりといえるだろう。

「ありのままの自分でいられた」「本音で話せた」といった集う人の言葉を聞き、喜びとともに「生の声には心の温度や安心を伝える力があると実感しました」と名波さん。政策学部の松浦さと子教授の授業で学んだコミュニティラジオへの関心とも重なり、新たな取組として2026年7月にミニラジオ局「FMななぬ路」を開設。当事者の声だけでなく、地域や京都の魅力も発信していくという。「私はLGBTQ+を特別なものとして伝えたいわけではありません。もしかすると隣にいる人も当事者かもしれない。そんな小さな想像力を持ってお互いを尊重できる人が増えていくとうれしいです」と名波さん。「にじのわ」という名称どおりLGBTQ+の象徴である虹の架け橋となり、多様な人びとの輪を繋いでいく。



インドボタジユを観察する横田准教授(左)と三浦教授(右)

※1 2027年4月から「びわ湖大津キャンパス」に名称変更

※2 2027年4月から「理工学部」に名称変更

04 Education, Unlimited

農学部

三浦 励一 教授

先端理工学部

横田 岳人 准教授



約70年の時を超え、インドボダイジュが里帰り 学生たちが歴史を未来へつなぐ

学生の学びと新キャンパスのシンボルに

2026年5月に、龍谷大学とインドとの交流の歴史を伝える一株のインドボダイジュが約70年ぶりに本学に帰ってきた。今後は、龍谷IP事業の一つである、学生主体で瀬田キャンパス^{*1}に植物園づくりを進める実践型学修プログラム「Ryukoku Botanical Garden」にて大切に育てられていく。同プログラムは、2021年より農学部と先端理工学部^{*2}が連携して実施している。

このインドボダイジュは、1958年9月に国賓として来日したインド初代大統領ラージェンドラ・プラサード氏が龍谷大学を訪問し、本学が第1号となる名誉博士号を授与した記念として贈られた苗に由来する。当時、大宮キャンパスに植樹されたが、越冬管理のため大阪市立大学理工学部附属植物園（現：大阪公立大学附属植物園）に移植。1976年に温暖な気候で知られる鹿児島県指宿市の乗船寺に株分けされ、長く守り継がれてきた。同寺院は本学出身の藤岡義尚氏が住職を務め「ぜひ母校へ里帰りを」と提案があったことから、再び本学で受け継ぐことになったのだ。2026年7月に瀬田キャンパスの樹心館で開催された記念講演会には、入澤崇龍谷大学理事長が

登壇し「インドボダイジュ（菩提樹）は、釈尊（お釈迦さま）がその下で悟りを開かれた樹木で、ムクウジュ（無憂樹）、サラソウジュ（沙羅双樹）と並ぶ仏教三大聖樹です。釈尊の誕生、成道、初説法、入滅という重要な場面には樹木が深く関わっており、浄土真宗の精神を建学の精神とする本学にとっても植物は大変重要な存在です」と語った。

インドボダイジュをはじめとする植物は、信仰の対象として人々に安らぎを与えてきただけでなく、光合成によって二酸化炭素を吸収し、酸素を放出することで、地球環境や生物の命を支える役割も果たしている。だからこそ、本学は自然共生社会をめざして様々な取組を展開してきた。「Ryukoku Botanical Garden」もこの自然共生の理念に通じている。プログラムを担当する横田岳人准教授は「以前から瀬田キャンパスには自然博物館のような場の必要性を感じていました。植物園づくりは生物系教育の充実と学生の環境意識の醸成、キャンパス全体の活性化も図るためにスタートしました」と語る。同じく担当の三浦励一教授は「プログラムでは龍谷大学らしい植物園をめざし、いつかは仏教三大聖樹を迎えたいと考えていたので、インドボダイジュの帰還には大きな喜びを感じました」



2026年7月に樹心館で開催された記念講演会「仏教と植物」の様子

目標は龍谷大学にしかできない植物園

「Ryukoku Botanical Garden」は、農学部
の「農学部特別実習A」、先端理工学部の「プ
ロジェクトリサーチ」として実施。専門家が整
備した植栽などを利用するのではなく、学生
自身が設計、施工、管理に携わることが特長
である。「活動当初はキャンパス内の様々な
場所の土壌や日照時間といった生育条件を
調査し、整備を重ねました。また、様々な植物
園を訪問し、園の特色や展示方法なども学び
ました」と三浦教授。

植物の管理方法や本学らしさの表現を試
行錯誤するなか、1号館正面の噴水周辺に仏
教と縁の深いハス園を整備。次々にハスが開

花すると学内でも評判となり、学生たちの意
欲向上にも繋がった。現在はハス園をはじめ、
仏教の精神を象徴する色の植物をテーマに
した「仏教五色の庭」、植物の進化をたどる
「4.7億年の庭」の整備が進んでいる。その一
つである「ユニバーサル植物園」は、本学が重
視するインクルーシブな学びを具体化したも
の。全盲の研究者を招いたワークショップを
もとに、植物の香りや感触を全身で味わえる
よう、座ったり寝転んだりできる植栽空間を
設けるなど、学生のアイデアを取り入れた。

これから学生たちが生育に関わっていくイ
ンドバダイジュは寒さに弱いため、現在は農
学部の研究用温室で育てられているが、観賞
しながら育てるための新しい温室の整備に



も動き始めている。「このプログラムは普段生物に触れる機会の少ない数理系の学生も受講しています。大学は専門分野を縦系として深め、異分野を横系として広げながら、自分自身の思考を紡いでいくことが大切です。インドボダイジュはこういった学生の学びに効果をもたらしていくはずです」と横田准教授。続けて三浦教授も「インドボダイジュはもちろん、キャンパスの庭を、様々な学びや人が集う場所にしていきたいと思います。他の植物園では、インドボダイジュは熱帯植物として展示されることが多いですが、本学では釈尊がその下で悟りを開いた樹木であることや、受け継がれてきた歴史も伝えていきたいと考えています」と展望を語った。



三浦 励一

京都大学大学院農学研究科博士課程修了。博士（農学）。専門は雑草学、植物保護科学、生態・環境、農業技術史、文化人類学・民俗学。京都大学農学部助手、京都大学大学院農学研究科助手、同講師を経て2015年に龍谷大学農学部准教授就任。2026年より教授。日本雑草学会に所属。



横田 岳人

名古屋大学大学院農学研究科修了。博士（農学）。専門は森林生態学、保全生態学、自然再生・環境修復学。国立環境研究所、奈良女子大学理学部助手を経て2003年に龍谷大学理工学部講師に就任。2006年より理工学部准教授。2020年より先端理工学部環境科学課程准教授。日本生態学会、日本森林学会、日本植物学会に所属。

自分も周りもより幸せに より良く生きるための力を育んでいく

ポジティブ心理学で育むウェルビーイング

心理学には、人の弱さや心の不調の原因を探り、その回復をめざす側面がある一方で、人が本来持つ強みや可能性に着目し、それらを伸ばすことをめざす領域もある。その一つが、牧久美子講師が担当する授業「ポジティブ心理学」。より幸せに、より良く生きる状態を表す「ウェルビーイング」の維持・向上を科学的かつ実践的に探究することを特長としている。

「コロナ禍をはじめ先行き不透明な時代背景もあり、多くの人たちが持続可能な社会には一人ひとりの心身の健康や豊かな人生が欠かせないことに気づき始めました。そのためウェルビーイングが一段と重視されるようになり、研究も発展しています」

心理カウンセラーや心理学の研究者の道に進む前は、外資系企業の人材開発部に所属していた牧講師。一人ひとりの強みに目を向けることが、個人だけでなく組織全体の成長にも繋がるという現場での経験も授業の内容や指導に活かしている。

授業は前半の数回にかけて「ポジティブ心理学」の成り立ちやウェルビーイングの定義などを講義で学習。その後、グループディスカッションやロールプレイを通じてウェルビー

イングの維持・向上のための実践を積み重ねていく。「前向きになろうという精神論ではなく、多くの研究者や専門家による実験・調査によって効果が検証された、科学的根拠に基づく方法を学生たちは修得していきます。この方法はいくつもありますが、共通しているのは日常の行動にほんの少し変化を加える、物事や人に対する見方や考え方を工夫することが軸になります」と牧講師は語る。

学生たちはまずウェルビーイングを測定するツールを使って自らの幸福度を診断したり、挑戦や希望、親しい関係といったウェルビーイングに繋がると思われる様々な要因が書かれたカードを選び、なぜそれに価値や幸福を感じるのかをグループでディスカッションすることで自身の価値観を見つめ直していく。また、一日の終わりにその日にあった良い出来事を3つ書き出すスリーグッドシングス、困難から立ち直る力を育むレジリエンス、自分自身を思いやるセルフ・コンパッションといった方法も実践。当初は「3つも良いことが思い浮かばない」「何事もネガティブに考えてしまう」といった声も聞かれたが、実践を重ねるうちに「小さな喜びに気づけるようになった」「自分に優しくなった」と日々の行動や物事の捉え方に変化が表れていったという。



学生に寄り添い授業を進める牧講師



自他尊重が「共生」社会の第一歩

後半から終盤の授業では「アサーション」が取り上げられた。これは自身も他者も尊重しながら考えや思いを適切に伝える、人権にも基づいた自己表現の方法である。「日本では、自らの思いを率直に言葉にすることを控える傾向にあります。しかし、自らの思いを伝えられないことで困難や葛藤を抱える人も少なくありません。より良い自己表現のための知識・技術があると、自分の考えをしっかりと伝え、相手の思いも理解できる適切な対話が成立し、関係性もより良くなっていきます」

より良い伝え方や対話について、この日は共働き夫婦を想定したロールプレイで練習。

家事を分担してほしい妻役と、仕事が忙しく家事を妻任せにしている夫役に分かれて、対話を始める学生たち。相手を尊重しつつ、自分が無理や我慢をしないためにはどのように伝えればいいのか。話が上手くまとまるペアもあれば、平行線をたどるペアもあった。そこで妻役と夫役を交代すると相手の思いや事情に気づき、互いを大切にする対話が進んだ。

こうした学びは「龍谷大学基本構想400」に示される、他者とともに生きていく姿勢とも重なっている。「アサーションで大切にしている自他尊重もそうですが、ウェルビーイングは自分だけでなく、周りの人の幸せによっても高まっていきます」



心理学を学ぶ学生の進路は臨床心理の専門職に限らない。多くは企業をはじめ様々な分野へと進む。一般社会に出れば、価値観や立場の異なる多様な人たちと関わっていくため、自己表現や相互理解などに悩む場面にも直面するだろう。「そんなとき、相手を大切にしながら、自分らしさも見失わないように、授業で学んだ方法を活用してほしいと思います。自分の態度やふるまいのスイッチは常に自分が持っています。そんな“人生のリモコン”を自分で操作できる力がウェルビーイングにも、共生にも繋がっていきます」と牧講師。未来を担う学生にとって「ポジティブ心理学」が自他ともにより幸せに、より良く生きるための土台となっていく。



牧 久美子

企業勤務を経て、公認心理師・臨床心理士の道へ。龍谷大学文学研究科臨床心理学専攻^{※1}博士後期課程修了。2017年龍谷大学文学部臨床心理学科^{※2}非常勤講師、2024年より龍谷大学心理学部講師。専門は臨床心理学、システムズアプローチ、ウェルビーイング。現在もスクールカウンセリングに携わるなど臨床経験豊富。

※1 2025年度より心理学研究科

※2 2023年度より心理学部



睡眠データを学生と分析する高原講師



健やかな眠りが未来を拓く 「睡眠教育アプリ」を開発

先生はAI猫。親子で睡眠を学習

日本では、睡眠時間を削って働くことや勉強することが「がんばっている証」と受け止められがちである。事実、日本の平均睡眠時間はOECD（経済協力開発機構）加盟の33カ国中、最下位という結果を長年脱していない。しかし、睡眠不足が慢性的に続くと、心身に大きな影響を及ぼし、生産性も低下。経済損失は18兆円以上ともいわれている。高原まどか講師はこういった睡眠の問題を解決し、心身の健康を向上させる研究に取り組んでいる。研究の出発点は自身や家族の心身の不調だった。「根本的な治癒や解決には、自身の心身の状態を知り、対策していくことが必要であり、私の専門である情報工学の知見を活かしていくことができるのではないかと考えました」と高原講師は語る。

まずは、生体情報を取得できるウェアラブルデバイスを使って一人ひとりの睡眠を可視化し、自発的な改善を促進する仕組みの構築に取り組むが、その過程で、個人に働きかけるだけでは日本の睡眠問題の解決には繋がらないことに気づいた。「個々の睡眠状態の改善に加えて、睡眠に対する正しい情報の普及や次世代への早期教育など、睡眠リテ

ラシーの向上を図る何重ものアプローチが必要でした」と高原講師。

そこで着手したのが「睡眠教育」アプリケーションの研究開発である。親子を対象とし、アプリ内のAI猫を育てるゲームとして設計。プレイヤーの睡眠データを入力すると、エサをはじめ世話に使えるアイテムが増え、AI猫の機能も高まっていく。子ども一人でも遊べるが、保護者もプレイヤーになると特別なアイテムが付与されることで「一緒に遊ぼう」と思える仕掛けも施した。「年齢にかかわらず、睡眠は個人の活動ですが、親子の共同作業としたのは、両者が睡眠について学び支え合うことで、ともにより良く眠ることを根づかせたいと考えたからです」設計側の評価基準を設定すると生活スタイルや体質に合わない場合があるので、親子で定めた目標を達成できたかを重視。AI猫が先生となって親子が学ぶ教育機能も搭載したいと考えているが、このAI猫、質問に答えないこともあるらしい。「『お母さんが知っているかもしれないから聞いてみて』といった助言によって、親子のコミュニケーションを促します。何でも初めから答えや正解を示すのではなく、人間自身が考えることへと導く、そんなAIの新たな役割も追究しています」



睡眠中の呼吸や心拍数などのデータもアプリ開発に不可欠

人、社会にとっての情報の意味を問う

睡眠教育アプリの研究開発では、ウェアラブルデバイスで取得した生体データの解析やAIモデルの高度化を進める一方、高原講師は技術一つひとつの意味も問い続けるという。

「私が専門とする人間情報学と社会情報学は、理系の情報工学のなかでも文系的な側面を持つ分野です。人間情報学では人にとって情報とは何かを考察していき、社会情報学では社会が情報をどう扱い、情報が社会にどのような影響を与えるのかを見出していくことが軸になります」

この考えは、高原講師が過去に高齢者施設でおこなった睡眠アプリの研究にも表れて

いる。高齢者の睡眠状態を花の数や色、咲き方で表現したところ「今日は綺麗な色の花がよく咲いているね」と、職員や面会に訪れた家族との会話が弾んだという。さらに、蓄積した睡眠データは適切なケアに活用。一つの情報が多方面に役立つことを示した。また、睡眠は光や温度、音といった環境要因だけでなく、日々の出来事やストレスによっても時間や質が左右されることから、心の安定を図り、睡眠改善を促す機能の開発も見据えている。

2027年4月、龍谷大学には情報学部が誕生する。理系・文系を超え、人々の生活や豊かな社会を支える基盤となる情報技術を切り拓いていく。「学部が掲げる『情報×健康』、『情報×教育』といった領域は、まさに私が追



い求めてきたことです」と意気込む高原講師。睡眠教育アプリはまだ検証段階だが、複数の親子によるテストでは「子どもが睡眠に関心を示すようになった」「親子の会話が増えた」と好評。そのなかで、情報やデバイスとの適切な距離感も検証する必要性を感じたという。「SNSやICT機器の普及によって、私たちは四六時中、膨大な情報にさらされています。だからこそ、それらに流されるのではなく、自分や周囲の人々の健康や幸福のために必要な情報を選び取る力が不可欠であり、学生に身につけてほしい力でもあります。情報は人が動くことで生まれるもの。『より良い、人々、人と社会との関わりを』を私の哲学として、これからも研究に取り組んでいきます」



高原 まどか

同志社大学理工学部情報システムデザイン学科卒業。同志社大学大学院理工学研究科 情報工学専攻博士前期・後期課程修了。修士・博士(工学)。2018年同志社大学 研究開発推進機構及び理工学部特別任用助手、2019年米スタンフォード大学睡眠生体リズム研究所(SCNLab) 客員研究員などを経て、2022年より龍谷大学先端理工学部助教。2026年より龍谷大学農学部講師。

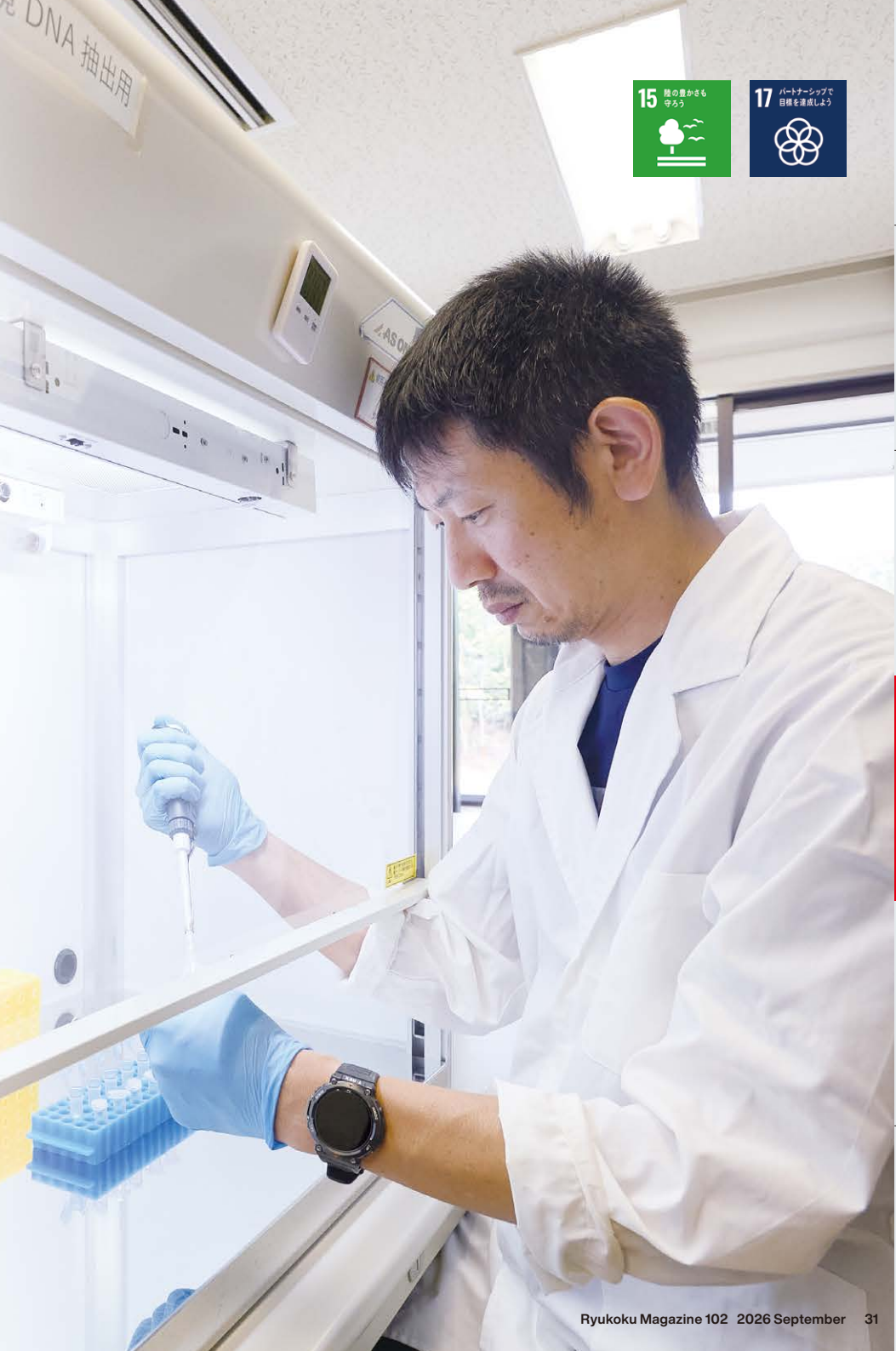
ネイチャーポジティブ実現に向けて 環境DNAによる「ものさし」を開発

今後の社会・経済を導く生物の欠片

生物多様性の損失を食い止め、自然を回復軌道にのせるための世界目標「ネイチャーポジティブ」。2030年までの実現には、政策立案や企業の事業活動など、あらゆる場面で生態系を守り育てることが不可欠である。しかし、生物多様性への配慮や保全の進捗・成果を客観的に示す指標は、いまだ十分に整備されていない。地域ごとに異なる生物や生態系は一律の基準での評価が難しく、適切に評価し、その保全と社会・経済活動を両立させる仕組みの構築が広く求められている。

龍谷大学は2024年に「ネイチャーポジティブ宣言」を発出。ネイチャーポジティブに携わる人材育成、研究成果の社会実装を推進し、国や自治体、企業との協働事業にも取り組んでいる。その中核を担うとともに、全学的な旗艦研究「龍谷フラッグシップ研究プロジェクト」として2025年に始動したのが「環境DNA分析による生物多様性保全総合指数（以下BCCI[※]）開発プロジェクト」だ。龍谷大学生物多様性科学研究センター長の山中裕樹教授を研究代表者に、本学、公益財団法人東近江三方よし基金、株式会社滋賀銀行の三者が連携して推進している。

「地球温暖化に温室効果ガス排出量といった指標があるように、BCCIは誰もが評価・共有できる“自然のものさし”となります」と山中教授。この基盤となるのが環境DNA分析である。環境DNAとは、生物の皮膚片や粘液、排泄物などを通して水中や土壌に残されたDNAのこと。2009年に山中教授は源利文教授（神戸大学大学院人間発達環境学研究科）とともに、水中には生物由来のDNAがこぼれ落ちているのではと着目。河川や湖沼で採取した水から生物の種類を明らかにする革新的な手法を開発した。水をろ紙で濾してDNAを回収し、試薬を加えて分析できる状態に精製。次に新型コロナウイルスの検査で知られるようになったPCR法で特定のDNAを増幅させて検出する。例えば、アユのDNAを増やして陽性反応が出れば、採水地点にアユが生息していることが分かる。生き物を捕獲する必要がなく、結果が出るのも早い。「現地でおこなうのはコップ一杯の水を汲むだけ。私たち専門家が汲んでも、住民の方が汲んでも得られるサンプルは同じです」という利点を活かし、山中教授は市民参加型の「びわ湖100地点環境DNA調査」を実施している。BCCIにおいても広域の生物情報の継続調査が不可欠なので、山中教授の手法は大きな強みとなる。



Feature Article

People, Unlimited

Education, Unlimited

Research, Unlimited

Connect, Unlimited

News & Topics



琵琶湖の水をサンプリングする山中教授

環境先進県・滋賀からBCCIの成功事例を

市民が汲んだ水をはじめ環境DNAのサンプルには、生物に関わる膨大な情報が複雑に含まれている。「生の分析データでは何も伝わらないので、情報を取り出し、誰もが分かるものに“翻訳”するのが私たちの役割です」と山中教授。BCCIは生物の種類や数だけでなく、生物や生態系の状態、地域の生物多様性への影響なども検証でき、複数の情報を組み合わせた評価も可能だ。「希少種を守りたいのか、森や川の状態を知りたいのかなど目的に応じた情報を検出・分析し、指数で示せます。また、基準を定めてモニタリングを継続すれば、自然環境や生物多様性の変動を

把握できます。もし指数がマイナスなら改善策や投資が必要ですが、これこそがBCCIの目的です。自然環境や生物多様性の保全には社会貢献活動の域を超えて、自治体の保全計画や企業経営の意思決定、金融機関の融資判断といった政策や事業そのものに組み込んで実行していかなければ、持続的な繁栄は不可能でしょう」と山中教授は提言する。

こうした社会実装を進めるためにも、BCCIを有効かつ長期的に活用していくことが重要だ。今回の三者連携も、その実現に向けた取組の一つである。その具体例が滋賀銀行の「びわ湖ブルー預金」だ。琵琶湖をはじめとする自然環境や生物・生態系の保全活動・研究に当該定期預金残高の一定割合を同行が寄



附するスキーム。預金者にはBCCIを使って県内の自然環境や生物多様性の状態を報告していくという。「預金には想定の倍以上の申し込みがありました。滋賀県民は自然環境保全への意識が高いので、BCCIの社会実装が加速度的に進むと思います。この滋賀の成功事例を増やし、全国に広げていきたいです」

山中教授はBCCIと並行して、環境DNAを将来にわたって保管・活用するための基盤づくりの必要性を見据える。「環境DNAは冷凍保存できるので、後から別の生物の情報の抽出が可能です。環境DNAのサンプルは自然資本に関わる情報の貴重なタイムカプセルです。厳重な保管と活用の体制を築き、未来に繋いでいきたいと思っています」



山中 裕樹

京都大学大学院理学研究科修了。博士(理学)。魚類生態学者。生物多様性科学研究センター長。2009年から龍谷大学での研究を開始。2020年龍谷大学先端理工学部准教授、2024年龍谷大学先端理工学部教授に着任。一般社団法人「環境DNA学会」設立メンバーの一人。国土交通省「河川水辺の国勢調査」に環境DNA調査手法が採用。

古刹の寺宝が揃う貴重な機会 邪鬼の抱っこなど斬新な企画も多数

秋季企画展

「みんなおいでん!東三河の普門寺さん」

2026年9月19日(土)～11月23日(月・祝)

休館日: 月曜日(ただし、9月21日、10月12日、11月23日は開館)、9月24日(木)、10月13日(火)

主催: 龍谷大学 龍谷ミュージアム、京都新聞、中日新聞社

本展では愛知県豊橋市の船形山普門寺(せんぎょうさんふもんじ)に伝わる仏像や古文書、経典などが一堂に会す。「収蔵庫の建て替えに伴い、私たちが寺宝の一部をお預かりすることとなり、今回の企画展が実現しました」と話す村松加奈子龍谷ミュージアム学芸員は豊橋市出身。地元の寺院の収蔵庫改修というまたとない巡り合わせに縁を感じ、三河弁で「おいで」を意味する「おいでん」を企画展のタイトルにした。

普門寺は愛知県と静岡県との県境に位置する。奈良時代の創建以来、東三河を代表する山岳寺院として栄えてきたが、延暦寺との対立や、戦国時代に一山を焼失するなど、激動の歴史を歩んできた。近年は自治体や県内の大学による研究調査が進み、歴史的な重要性が改めて明らかになっている。村松学芸員は「困難に直面しても自由な発想と知恵で復興を遂げてきた普門寺のバイタリティに驚かされます」という。例えば、現在進行中の収蔵庫改修ではクラウドファンディングを実施したが、江戸時代にも全600巻からなる仏教経典『大般若経(だいはんにゃきょう)』を購入する

ため、寄進者の名前や願いを書き記すことで資金を募ったという。もちろん、この経典も本展で鑑賞できる。

普門寺の時代を先取りするDNAは現住職にも受け継がれ、今回の企画展にも息づいている。まず展示される大半の寺宝の写真撮影が可能。台座を含めて約3メートルにも及ぶ「伝釈迦如来坐像」「阿弥陀如来坐像」は露出展示されるため「圧倒的な大きさと威厳を間近で体感できます」と村松学芸員。さらに龍谷大学古美術研究会との初コラボによる学生たちの解説、2D仏像顔出し看板アーティスト・ニシユキ氏が制作した顔出し看板での「仏像仮想ワークショップ」など、誰もが楽しめるイベントが目白押し。住職の解説付きの「抱き邪鬼」体験では千年前の邪鬼を実際に抱っこできるのだ。「ご住職から大胆な企画をご提案いただき、私たちも普門寺の革新性を楽しんでいます」。龍谷ミュージアムでもかなり斬新なこの企画展に「みんなおいでん」。



村松 加奈子 龍谷ミュージアム学芸員



龍谷ミュージアム
Webサイト



重要文化財 伝釈迦如来坐像 平安時代後期 普門寺



龍谷大学先端理工学部准教授
知能情報メディア課程
(2027年4月より情報学部)

藤本 雄一郎

龍谷大学先端理工学部
数理・情報科学課程3年生

二宮 音乃

株式会社平和堂
DX戦略部
アシスタントマネージャー

荒川 季紗

ソフトバンク株式会社
法人事業統括 AXソリューション本部
ビジネスプロデュース第3統括部

真田 潤平

※1 ハッカソン(Hackathon)

プログラムの改良を意味するハック(hack)とマラソン(marathon)を組み合わせた造語。IT技術者がチームを組み、与えられたテーマに対して、定められた期間に集中的にソフトウェアやサービス、モノを開発し、アイデアの斬新さや技術の優秀さを競い合うイベント。

龍谷大学×ソフトバンク×平和堂 地域のスーパーの課題に挑む「ハッカソン」

龍谷大学は、2024年からソフトバンク株式会社とともに「ハッカソン^{※1}」をスタートさせた。2026年は株式会社平和堂が参画し「スマートライフ」をテーマに開催。そこで、今回のメンターを務めたソフトバンクの真田潤平氏と平和堂の荒川季紗氏、サポート教員の藤本雄一郎准教授、学生を代表して二宮音乃さんが座談会をおこなった。

荒川:平和堂ではデータやAIを活用し、新しい買い物体験を作る取組を進めています。そのなかで、40代以下の若い世代の来店を促すアイデアを求めて、今回初めてハッカソンに参画しました。

藤本:本学にとってハッカソンは実社会の課題解決に向けて、学部や学年、専門の異なる学生が協働する貴重な実践の場です。今年度も、先端理工学部の学部生・大学院生、農学部の学部生から30名を選抜し、多様な5チームを編成することができました。

二宮:私は、ハッカソンが短期間で仲間と一緒にアイデアを形にし、成果を競い合うイベントだと知り、これまで積極的に行動を起こすことが少なかった自分を変えたいと思い、挑戦しました。

真田:当イベントは2週間ごとに4つのSTEPで

開催します。STEP1〜3で企画を出し合うアイデアソンとモノづくりをおこなうハッカソンを実施します。今回は40代以下の来店促進のアイデアをカタチにするため、ソフトバンクからLINEヤフーのビッグデータを活用・分析する「DS.INSIGHT」、AIでペルソナを設定し、数千人規模の回答を生成できる「爆速アンケート」というツールを提供しました。

二宮:提供された「爆速アンケート」を使って私たちの考えを分析すると「子連れでは安心して買い物をすることが難しい」という課題がわかったのです。そこで、私たちは30代の子育て世代の課題解決をめざすことにしました。

荒川:私と真田さんは二宮さんのチームのメンターを務めたのですが、当初は平和堂の課題と二宮さんのチームのアイデアがマッチしていない部分もありました。ただ、私たちから答えを示すのではなく、自由な発想を大切にすることを意識しました。

藤本:マッチしていないのは他チームも同様で、自分たちの目で課題を確かめるように平和堂でのフィールドワークを実施しました。

荒川:確かにフィールドワーク以降、全チームとも考え方が明らかに変わり、私たちの課題感とも合うようになりましたね。



ソフトバンク本社での最終発表に臨む学生たち

二宮: 私たちの考えを実際の売り場で確認することで、安全・安心への配慮の大切さを改めて感じ、子どもが走り回った際に従業員の方が声を掛けるなどして対応されていることも知りました。そこで企画を練り直し、遊びと学びを取り入れた『はとナビ おつかいクエスト』というプロダクトを開発しました。スマホに登録した買い物リストに沿って子どもが売り場を回り、提示された食育クイズに回答するとポイントをもらえます。保護者の方の安心、従業員の方の負担軽減を図るため、店内での安全ルールも設けたことがこだわりです。

真田: プロダクトの開発では企画内容に加え、ユーザーがサービスを知り、便利に使ってもらうためのプロセスを考えることも大切ですね。

二宮: はい。ソフトバンク本社での最終発表会に向けては、子どもたちが使いやすいよう表

記を平仮名に変える、何度も動作確認するなど改善の繰り返しで、大変でしたが、完成したものにはチーム全員が手応えを感じ、自信を持って発表に臨みました。

荒川: 『はとナビ おつかいクエスト』を通じて、お買い物中に子どもは楽しく学ぶことができ、保護者は安心して買い物ができる。さらに店内で見守る従業員にはゆとりが生まれる。また、地産地消への興味を育むことで、街全体の豊かさへと広がっていく。この循環は、平和堂の「三方よし」の精神とも重なり、とても感動しました。

真田: ハッカソンでは課題や目的がぶれる場合が少ないのですが、二宮さんのチームは「店内での子どもの過ごし方・接し方」という軸が一貫していたことも良かったですね。



二宮:ありがとうございます。私たちの『はとナビ』が第1位に選ばれた時は本当にうれしかったです。私自身は挑戦することの大切さを実感し、この約2カ月で得た経験をこれから学びや将来に活かしていきたいと思っています。

藤本:二宮さんのチームの提案は、店舗での課題と解決策の繋がりが明確で、サービスとして展開することになった時も比較的障壁が少ないのではという評価もありました。

荒川:実装の可能性は大いにあります。他のチームの提案も素晴らしく、社内では気づいていなかった課題も明確になったので、今回のアイデアの種を大切に育てていく予定です。また、私は龍谷大学出身なので、後輩たちの姿が頼もしく、同じ滋賀にある平和堂の魅力を伝えられたことも大きな励みとなりました。

真田:今回、5チームの提案を受けて、これからは荒川さんがおっしゃったように、学生のアイデアを社会実装に繋げる仕組みを築いていくが必要だと感じました。龍谷大学のハッカソンは、より新しく質の高いアイデアを生み出すことはもちろん、その先へと進めるものにしていきたいと思います。

藤本:2027年4月、瀬田キャンパスは農学部、理工学部^{※2}、情報学部、環境サステナビリティ学部の4学部が集う「びわ湖大津キャンパス」となり、これまで以上に幅広い学びの環境が整います。このハッカソンをはじめ、多様な背景と専門性を持つ学生たちが切磋琢磨し、社会実装に繋がる研究やプロジェクトをより充実させていきたいと思っています。さらに、企業や地域との連携を一段と深め、社会課題の解決に向けて学生のアイデアを社会に繋ぐハッカソンをめざしていきます。

※2 2027年4月、「先端理工学部」から名称変更



08 My Campus マイキャンパス

タイトル「顕真館と水盤とうろこ雲」

Tさん 2026年6月撮影(深草キャンパス)

「My Campus」ページでは、時代の流れとともに変わりゆく龍谷大学の「今」を感じていただけるキャンパス風景写真を、読者の皆さまから募り紹介しています。キャンパスの素敵な瞬間を是非写真に収めてご応募ください。

応募写真の中から厳選の上、次号の本ページを飾らせていただきます。

応募締切

2027年1月8日(金)

募集内容

龍谷大学のキャンパスを撮影した写真
(本学と関連のある場所・施設等)

応募方法

以下のフォームからご応募ください。
<https://www.ryukoku.ac.jp/about/mycampus/>



注意事項

- ・2026年9月以降に本人が撮影した写真に限ります。
- ・1点につき10MB以内のjpgファイル。
- ・誌面の都合上、掲載は横サイズのトリミングとなります。撮影の際にはご注意ください。
- ・組写真、合成写真、過度の画像補正など実像に反する写真は不可。
- ・著作権・肖像権の侵害には十分に注意してください。
- ・応募に係る個人情報は本事業以外には利用しません。
- ・応募写真については、本学の広報活動(大学公式グッズ等を含む)に使用させていただく場合があります。応募をもって、これらの使用に同意いただいたものとします。

応募写真は以下から閲覧いただけます。
龍谷大学の「今」を是非ご覧ください。

<https://www.ryukoku.ac.jp/about/pr/publications/mycampus/>



最新情報



バドミントン部「関西学生春季リーグ戦」 男女ともに1部リーグ優勝 男子は3季連覇・女子は28季連覇

2026年4月、「関西学生春季リーグバドミントン大会」でバドミントン部が男女ともに1部リーグ優勝。春・秋を通じて、男子は3季連続、女子は28季連続の快挙だ。男子は第1シングルスをととしたものの、第2シングルスとダブルス2試合を制し、3-1で優勝。女子は第1シングルスから3連勝し、1試合も落とさずストレート勝ちでの優勝。個人賞では、突沖花歩選手（社会学部1年）がバドミントンマガジン賞（MVP）を受賞した。



「ヨーロッパオープン・ソフィア」 柔道部の木村穂花選手が63kg級で優勝

2026年1月、ブルガリアのソフィアで開催された国際大会「ヨーロッパオープン・ソフィア」に女子63kg級日本代表として出場した柔道部の木村穂花選手（経営学部1年）が、見事優勝を果たした。決勝戦ではフランスのNGUYEN選手と対戦し、3分12秒に内股「有効」から寝技に移り、横四方固「一本」での勝利。この大会では全試合一本勝ちという圧巻の内容で、大学入学後2度目の国際大会出場にして、初の国際大会金メダルを獲得した。



「第49回全日本アンサンブルコンテスト」 で吹奏楽部が、 4年連続、通算12回目となる金賞を受賞

2026年3月、広島文化学園HBGホールで開催された「第49回全日本アンサンブルコンテスト」（全日本吹奏楽連盟・朝日新聞社主催）で、関西代表として出場したクラリネット四重奏が、審査員全員から最高評価を受け、金賞を受賞した。本学吹奏楽部の金賞受賞は、4年連続、通算12回目となる。全国11団体が出場したこのコンテストで、3年生3名、1年生1名の計4名で構成されたチームは、日々の研鑽の成果が実を結び、日本トップレベルの実力を発揮した。



多様性を尊重し、推進する大学としての決意を改めて表明 「龍谷大学ダイバーシティ宣言」を発出

龍谷大学は、2039年の将来ビジョンとして『「まごころ〜Magokoro〜」ある市民を育み、あらゆる『壁』や『違い』を乗り越え、世界の平和に寄与するプラットフォームとなる』ことを掲げている。このビジョンの実現に向けた取組の一つとして2026年3月「龍谷大学ダイバーシティ宣言」を発出。多様性を尊重し、推進する大学としての決意を広く社会に表明し、教育・研究・社会貢献を通じて、持続可能で誰一人取り残さない社会の実現に貢献していく。

SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS 17 GOALS TO TRANSFORM OUR WORLD



SDGsに対応した「THEサステナビリティインパクトレーティング2026」で 私大4位にランクイン

2026年6月に発表された英国の教育専門誌タイムズ・ハイヤー・エデュケーション（THE）社による「THEサステナビリティインパクトレーティング2026」で、本学はSDGsを活用した社会課題解決の取組を評価する世界的大学ランキングで、3年連続で国内私立大学4位（1位タイ：慶應義塾大学、立命館大学、3位：早稲田大学、4位タイ：上智大学、創価大学）にランクイン。これは、本学の長期計画「基本構想400」に基づく、社会課題解決に向けた継続的な取組の成果だ。



龍谷大学と株式会社アークエッジ・スペースが包括連携協定を締結、衛星を通じた社会課題の解決に向けた取組を開始

龍谷大学と株式会社アークエッジ・スペースは、2026年4月、大宮キャンパスにて包括連携協定を締結。仏教SDGsの理念に基づき、社会課題解決に全学で取り組む龍谷大学と「衛星を通じて、人々により安全で豊かな未来を」という理念を掲げる株式会社アークエッジ・スペースがともに、衛星を通じた教育研究、人材育成、産学連携の各分野で協力し、社会課題の解決と持続可能な社会の実現に向けた取組をスタートさせた。



龍谷大学が 令和7年度「しが生物多様性取組認証制度」 において最高評価で認証

2026年3月、龍谷大学は令和7年度「しが生物多様性取組認証制度」で、教育機関初の「3つ星（+加点4項目を含む）」に認証された。現時点では最高評価の認証であり、自然共生サイト認定の「龍谷の森」での活動、大学初の「ネイチャーポジティブ宣言」、サステナビリティ情報発信などが高く評価された。滋賀県によるこの制度は、生物多様性保全や自然資源の持続的利活用に取り組む事業者を認証し、その取組を「見える化」することを目的としている。



柔道部が熊本県湯前町と スポンサー契約を締結

龍谷大学は、学生の課外活動による遠征費や活動費の負担増に対応するため、2025年度から「サークルスポンサー制度」を導入。スポンサー企業・団体と連携し、学生への経済的支援をおこなうだけでなく、学生の自覚や責任感を育み、活動意欲向上に繋げていく。第1号として、柔道部が熊本県湯前町とスポンサー契約を結んだ。6月には湯前町長が学長を訪問し、今後の連携発展や学生成長支援について意見交換をおこなった。



夢を語り合ったセンパイとその親友が再集結、 新入生歓迎トークイベントを開催

2026年4月、新入生歓迎トークイベント「君たちは大学時代をどう生きるか～受験勉強と共に夢を語り合った二人からの挑戦のすすめ～」を開催。株式会社アミューズミュージックエンタテインメント社長の中西正樹氏（1998年文学部卒）とブラックマヨネーズの小杉竜一氏が登壇。異なる進路を歩みながらも交わした約束、社会人になって果たされた再会までのエピソードを語り、新入生に「今の経験は全てなるべくして在る」と伝え、勇気を与えた。



サッカー日本代表戦の 学内パブリックビューイングを 松永ゼミが開催

大学スポーツ応援促進プロジェクトの一環として、スポーツサイエンスコース・スポーツマネジメント研究室（松永敬子ゼミ）の主催で、日本代表戦2試合の学内パブリックビューイングを開催。約400名の学生・教職員が参加し、一体感あふれる応援空間が生まれた。体育局応援指導部とバトン・チアSPIRITSが連携し、本学独自の臨場感あふれるスポーツ応援空間を創出。今後もスポーツを通じた交流を促進し、本学のスポーツ応援文化の醸成をめざす。



京都レインボープライド、東京プライドに ブース出展・パレード参加

龍谷大学は建学の精神に根ざし、性的指向や性自認、性表現などを理由とした差別や偏見を克服し、誰もが自分らしく安心して過ごすことのできるキャンパスをめざす取組の一環として、プライドイベントに学生と教職員がブースを出展し、パレードに参加。SOGIE/LGBTQ+に関する取組は「RYUKOKU PRIDE LETTER」にて定期的に発信している。



<https://www.ryukoku.ac.jp/nc/news/entry-18782.html>



新「仏教学科」開始記念イベント 「インド映画『RRR』上映会」を開催

2027年4月に予定されている文学部改組により新たに展開する新「仏教学科」の開始記念イベントとして2026年6月に「インド映画『RRR』上映会」を開催した。映画鑑賞を通してインドの歴史・宗教・社会を知ること、新「仏教学科」の学びを体験できただけでなく、志賀浄邦文学部仏教学科教授（インド哲学、現代インド仏教）の解説を通じて、作品に見られる宗教文化や神話、部族社会やマイノリティ等の文化的・社会的背景への理解も深めることができた。



国内大学で初の試みとなるネイチャーポジティブの実践 深草キャンパスにハヤブサ人工巣を設置

日本の大学で初めて発出した「龍谷大学ネイチャーポジティブ宣言」に基づき、(一財)INPEX JODCO財団の協力のもと、深草キャンパスに国内大学初のハヤブサ人工巣を設置（写真のハヤブサは定着促進のため設置したデコイ）。ハヤブサは準絶滅危惧種であり、都市部での営巣場所が少ないことから、今回の人工巣設置は、都市部における猛禽類の新たな営巣場所を創出し、生物多様性の回復に貢献する社会的に重要な取組となる。



「龍谷大学学生気候会議実行委員(OCs)」の学生が安藤学長に提言書を提出

持続可能な社会の実現と世界の平和に貢献すべく、2022年1月に「龍谷大学カーボンニュートラル宣言」を発表。学生たちは同宣言の達成に向けて2021年度から「龍谷大学学生気候会議」を開催し、大学の気候ガバナンスへの参画をめざしている。2025年度龍谷大学学生気候会議では「龍谷の森の利活用」と「居心地の良い空間作りと脱炭素の推進」をテーマに議論し、安藤学長に「2025龍谷大学学生気候会議提言書」を提出した。



物価高騰等で経済的に厳しい学生への食支援として「百縁夕食」を実施

今年度も、7月1日より27日（土日を除く）まで「百縁夕食」を実施した。「百縁夕食」とは、1食100円で栄養バランスの取れた夕食を提供する取組で、2021年度より、コロナ禍の影響を受け、経済的な支援を必要とする学生への食支援を目的にはじまった。2026年度も物価高騰等の影響による学生への食支援と位置づけ、龍谷大学親和会（保護者会）の助成と、龍谷大学生協・Café Ryukoku & の協力を得ておこなわれた。



長きにわたる短期大学の歩みを振り返る 短期大学部メモリアルサイトを公開

1950 (昭和25) 年に誕生した龍谷大学短期大学部は、2025 (令和7) 年度以降の学生募集を停止した。75年にわたり、専攻科の設置、学科名称変更、こども教育学科の新設など、様々な変遷を経て、短期大学部が歴史に幕を下ろすこととなった。この度、短期大学部の沿革を記録し、あらためてその歴史を紹介する「龍谷大学短期大学部メモリアルサイト」を公開した。



<https://www.ryukoku.ac.jp/memorial/>



農学研究科の大学院生が 栽培したラッカセイを商品化 竹炭豆「ピーナッツの時間」

龍谷大学大学院農学研究科の大学院生たちが「グリーンチャレンジ演習」で圃場での土壌調査から播種、収穫、殻剥きまで自ら手掛けたラッカセイ「おおまざりネオ」を、老舗豆菓子メーカーの技術で香ばしい竹炭豆(竹炭ピーナッツ)に加工した「ピーナッツの時間」を販売。名称には「おいしく食べながら、低炭素社会の未来について考える時間になってほしい」という願いを込めた。収穫後の残渣は緑肥として還元し、環境にやさしい農業をめざしている。



宇治田原町活性化 龍谷大学×流芳園×MINORI工房による手摘み玉露を使用した「玉露ジェラート」を開発

2023年度より宇治田原町の地域活性化に取り組んでいる龍谷大学の課外活動団体「S-Project」が、手摘み玉露を使った発泡酒に続く特産品第2弾として、子どもたちも楽しめる「玉露ジェラート」を開発。宇治田原バスセンターで開催された「バス停カフェS」を皮切りに京阪宇治駅で開催された「宇治トレインマルシェ」や宇治田原地域住民主催「めぐり市」、KBS京都主催「京都ふるさと“おいしい”マルシェ」で個数限定販売。多くの方へ宇治田原の魅力を発信した。



高島市マキノ町の地域資源である棚田を活かし 経済学部西川芳昭ゼミが農村振興として 農作業から商品開発・販売までを実践

経済学部の西川芳昭教授ゼミは、滋賀県高島市マキノ町・森西集落と協働し、学生が「森西の棚田」で育てた有機栽培のもち米をパックご飯として商品化した。この棚田は「メタセコイヤ並木」への玄関口に位置し、地域全体で棚田を守る活動がおこなわれている。学生たちは農作業や商品企画開発を体験し、地域社会との連携の重要性を学んだ。また、学生たちが商品開発したパックご飯は3月の卒業式をはじめ学外やキャンパス内にて販売を行った。



「食べて、知って、世界とつながる」 留学生とともに世界の味をプロデュース

龍谷大学の学生団体Global StaRtが、イタリア、韓国、フィンランドからの留学生と協力し、それぞれの国の文化や食の魅力を取り入れたオリジナルメニューを開発。「食べて、知って、世界とつながる」をコンセプトに、イタリア、韓国、フィンランド各国の食文化や魅力を反映したメニューを提供。週替わりで各国をテーマとし、深草キャンパス内の「Café Ryukoku &」で6月29日から7月24日まで期間限定で提供し、本場の味や食文化の魅力を伝えた。



龍谷大学、再エネ100%の次の段階へ 瀬田キャンパスで発電×FIP調達の “ハイブリッド運用”開始

2026年4月から瀬田キャンパス内の建物2棟の屋上に太陽光パネルを設置し、本格稼働を開始した。これにより、キャンパス内で年間約23万kWhを創出し、供給促進交付金制度（FIP認定）適用の発電所から、環境価値付き電力を年間約261万kWh調達する予定。この取組は、学内での太陽光発電や再生可能エネルギーによる電力需給契約に加え、環境価値を含む外部電力の調達を組み合わせた「ハイブリッド運用」という先進的なものである。



琵琶湖南湖の在来魚に回復の兆し 環境DNA分析により 南湖の魚類相を可視化

龍谷大学生物多様性科学研究センターの伊藤玄博士研究員と山中裕樹センター長（先端理工学部教授）、株式会社日吉、滋賀県水産試験場、滋賀県立琵琶湖博物館のメンバーによる共同研究グループは、琵琶湖南湖の魚類を「環境DNAメタバーコーディング分析」で調査をした。その結果、外来魚増加による在来魚群集の減少が回復過程にある可能性が示された。また、この研究結果はIchthyological Research（日本魚類学会）に掲載された。



約70年の時を超え、 初代インド大統領ゆかりの インドボダイジュが再び龍谷大学へ

2026年5月、龍谷大学は鹿児島県指宿市の乗船寺からインドボダイジュの苗を受け取った。この苗の元は、1958年に国賓として来日したインド初代大統領ラーजेンドラ・プラサード氏が本学を訪問し、第1号の名誉博士号を授与したことを記念して、同大統領より贈られたもので、1976年に乗船寺に株分けされていた。この度、本学卒業生でもある乗船寺住職の寄贈により、インド初代大統領からのインドボダイジュが、約70年ぶりに本学へ戻ることとなった。

10 Book Café

新刊紹介

＊は大学から出版助成を受けた書籍です。
著者編者等は本学関係者のみ、お名前を掲載しております。



龍谷大学仏教文化研究叢書57
みんなちがって、みんないい。
金子みすゞの童謡にみる命の尊さ

鍋島 直樹 (文学部教授) 編
古荘 匡義 (執筆当時: 社会学部准教授) 編
永田文昌堂 / 2,750円 (税込)

＊



龍谷大学仏教文化研究叢書59
『大乗莊嚴經論』第V章の和訳と注解

菩薩の自利利他行
若原 雄昭 (龍谷大学名誉教授) 編・
桂 紹隆 (龍谷大学名誉教授) 著訳・
能仁 正顕 (龍谷大学名誉教授) 著訳・
早島 慧 (国際学部准教授) 著訳
法蔵館 / 3,300円 (税込)

＊



龍谷大学仏教文化研究叢書60
真宗法の燈火 復刻版 (全2巻)

中西 直樹 (文学部教授) 編
三人社 / 55,000円 (税込)

＊



龍谷叢書66
明治期仏教界の政治動向
尊皇奉仏大同団とその後

中西 直樹 (文学部教授) 著
三人社 / 5,280円 (税込)

＊



龍谷大学国際社会文化研究所叢書38
ジェントリフィケーションの功罪
ゆるやかな都市成長のためのケーススタディ

服部 圭郎 (政策学部教授) 編著・
阿部 大輔 (政策学部教授) 共著・
石原 凌河 (政策学部准教授) 共著
学芸出版社 / 3,080円 (税込)

＊



龍谷大学国際社会文化研究所叢書39
ベシミズムの時代とニーチェ

竹内 綱史 (経営学部教授) 編
昭和堂 / 9,350円 (税込)

＊



龍谷大学国際社会文化研究所叢書40
インクルーシブ・コミュニティ
まちの包容力を高める都市政策の実践

阿部 大輔 (政策学部教授) 編著・
白石 克孝 (龍谷大学名誉教授) 共著・
嶋 信敬 (政策学部教授) 共著・
大石 尚子 (政策学部教授) 共著・
中森 孝文 (政策学部教授) 共著
学芸出版社 / 2,970円 (税込)

＊



龍谷大学社会科学研究所叢書 第151巻
ナイジェリア研究の視角

さまよう「アフリカの巨人」をいかに紡ぐか
落合 雄彦 (法学部教授) 編著
晃洋書房 / 4,730円 (税込)

＊



龍谷大学社会科学研究所叢書 第152巻
「トライバル化」の時代
揺らぐ民主主義、変容する世界

松尾 秀哉 (法学部教授) 編著
吉南堂 / 3,960円 (税込)

＊



龍谷大学社会科学研究所叢書 第153巻
現代経済学の展開

新井 潤 (経済学部准教授) 編著
日本経済評論社 / 4,950円 (税込)

＊



欧州都市政策の軌跡と新潮流
16都市に見る都市アイデンティティのつくり方

服部 圭郎 (政策学部教授) 著
花伝社 / 2,750円 (税込)

＊



憲法と議院内閣制

時本 義昭 (社会学部教授) 著
成文堂 / 7,700円 (税込)

＊



介護福祉の先駆者の語り

理念と実践の軌跡

伊藤 優子 (社会学部教授) 共編著
あいり出版／1,980円 (税込)



実践中小会社法

法学の森・実践法学大系

今川 嘉文 (法学部教授) 著
信山社／8,800円 (税込)



アヘンの近世

オランダ東インド会社と海域アジア

大久保 翔平 (経済学部講師) 著
名古屋大学出版会／7,920円 (税込)



強誘電体研究の新展開

材料開発から誘電体ナノ特性、計算科学、次世代デバイス開発まで

木村 睦 (先端理工学部教授) 共著
(株)エヌ・ティー・エス／66,000円 (税込)



無印都市の社会学Ⅱ

どこにでもある日常空間をもっとフィールドワークする

工藤 保則 (社会学部教授) 共編著
法律文化社／2,570円 (税込)



物語で読み解く日本の近現代

文学・映画が描いた社会と記憶

瀬畑 源 (法学部教授) ・
手嶋 泰伸 (文学部准教授) 共著
ナカニシヤ出版／2,750円 (税込)



天皇制研究のフロンティア

近現代史からの挑戦

瀬畑 源 (法学部教授) 共著
吉田書店／3,850円 (税込)

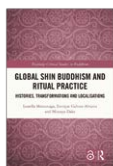


いま読む! 名著

ポストトゥールース時代の哲学

ニーチェ『楽しい学問』を読み直す

竹内 綱史 (経営学部教授) 著
現代書館／2,420円 (税込)



Global Shin Buddhism and Ritual Practice

Histories, Transformations and Localisations

嵩 満也 (国際学部教授) 共編著
Routledge／£ 155.00



近衛家

天皇・将軍が重んじた五摂家筆頭

樋口 健太郎 (文学部教授) 著
戎光祥出版／2,860円 (税込)



京都大学新聞の百年

不壊のヤジロベエ

松浦 さと子 (政策学部教授) 寄稿
小さ子社／4,950円 (税込)



学生とともに創る京都企業論

現場で学ぶ京都企業

龍谷大学経営学部・細川ゼミ 共著
文理閣／1,650円 (税込)

本学のオウンドメディア

本学ならではの知や取組に触れられるオウンドメディアをぜひご覧ください。

みんなの仏教SDGsウェブマガジン

ReTACTION

「仏教SDGs」を軸に、利他の哲学をもってサステナブルな社会の実現に貢献する本学の研究・活動を紹介するウェブマガジン

<https://retaction-ryukoku.com/>



「ReTACTION」の音声コンテンツ版として、本学教員へのインタビューを通じて、学問の知見や社会実装の可能性を発信するPodcast番組

<https://retaction-ryukoku.com/retaction-radio>



BEiNG

社会課題の本質を多角的な視点で掘り下げ、現代における自己の在り方を問いながら、社会に新たな気づきや議論のきっかけを発信するウェブメディア

<https://www.ryukoku.ac.jp/being/15/>



VO!CE

市民の悩みや迷いについて解決の視点・糸口を探るショート動画メディア

<https://www.ryukoku.ac.jp/voice/01/>



Academic Doors

対話で開く、研究の世界

本学の研究者との対話を通じて、多様な研究の魅力や社会課題の解決につながる知見を紹介する研究紹介サイト

<https://academic-doors-ryukoku.jp/>



Moglab

もぐらぼ

気軽に食や農の楽しさに触れていただくことをテーマに、歴史／文学／経済／健康／スポーツなど、様々な視点から伝えるウェブマガジン

<https://mog-lab.com/>



広報誌「龍谷」102号読者アンケート&プレゼントのご案内

今後の広報誌づくりのため、皆さまのご意見をお聞かせください。アンケートにご協力いただいた方の中から抽選でご希望の読者プレゼントが当たります。お寄せいただいた感想・近況は「読者のひろば」に掲載させていただくことがあります。当選者の発表は発送をもって代えさせていただきます。

締切 2026年12月25日(金)

Web応募フォーム

<https://www.ryukoku.ac.jp/enquete/102/>



読者プレゼント

ハガキでご応募の方は、ご希望のプレゼント名を明記した上で、住所・氏名・年齢・職業・電話番号・(龍谷大学卒業生は卒業年度・学部)および広報誌「龍谷」の感想・意見、近況などを書き添えてご応募ください。

※いただいた個人情報は広報誌「龍谷」の編集以外の目的には使用いたしません。

読者アンケートのあて先

龍谷大学 学長室(広報)

〒612-8577 京都市伏見区深草塚本町67

電話 075 (645) 7882 FAX 075 (645) 8692

E-mail: kouhou@ad.ryukoku.ac.jp

読者のひろば

大学がどんな風に変化しているか、学生たちがどんな頑張りをしているのか、興味深いです。(卒業生Uさん)

龍谷大学が建学の精神を基盤にしながらも、時代に合わせてしなやかに変化している様子がよくわかりました。(卒業生Tさん)

広報誌「龍谷」のデジタル版配信について

広報誌「龍谷」はデジタル版でも閲覧いただけます。

下記URLまたはQRコードからメールマガジンにご登録いただくと、デジタル版発行のご案内をお届けします。

冊子の送付停止を希望される方はフォームからご申請ください。

広報誌「龍谷」メールマガジン登録・冊子送付停止申請

<https://www.ryukoku.ac.jp/prdigital/>



広報誌「龍谷」デジタルライブラリー
(過去の広報誌もご覧いただけます)

<https://www.ryukoku.ac.jp/about/pr/publications/>



龍谷ミュージアム ペア招待券 … 10組20名様



オリジナルブレンドコーヒー
ドリッパック2種セット…10名様

農学部生が開発したコーヒー「ROOT」と「LEAF」を2種類セットでお届けします。

編集委員：山崎 正幸、木村 睦、野呂 靖、松永 敬子

事務局：東山 加奈子、谷 穂乃美

広報誌「龍谷」102号

2026年9月18日発行

編集：広報誌「龍谷」編集委員会

制作：龍谷大学 学長室(広報)

発行：龍谷大学

〒612-8577 京都市伏見区深草塚本町67

電話 075 (642) 1111 (代表)

龍谷大学ホームページURL

<https://www.ryukoku.ac.jp/>





公式 X 「龍谷大学広報」

[X.com/ryukoku_univ_pr](https://x.com/ryukoku_univ_pr)



公式 Instagram 「龍谷大学」

www.instagram.com/ryukokuuniversity



公式 Facebook 「龍谷大学」

www.facebook.com/RyukokuUniversity/



公式 YouTube 「龍谷大学」

www.youtube.com/user/RyukokuUniversity